

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ロシア語におけるlimitの概念について
Author(s)	米重, 文樹
Citation	ニダバ, 17 : 66 - 67
Issue Date	1988-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047195
Right	
Relation	



ロシア語における limit の概念について

米 重 文 樹

ロシア語の動詞アスペクトの対立において完了アスペクト（有標項）は、何よりもまず、動作の「非延長性（いつまでも続かないということ）」（A. M. Peškovskij）、「時間限定性・限界性」（V. V. Vinogradov）を表示するが、その「限定性」は、例えば「2時間勉強する」あるいは「一日中寝ていた」といった場合のように、動作自身の「内的な」時間的拡がりをもって提示されたものではなく、当該動作に直接先立つ（当該動作によって埋め込まれていないところの）時間段階をそれに直接後続する（同じく当該動作によって埋め込まれていないところの）時間段階の双方との関係を通して「外的に」付与されたものである（フランスのロシア語学者 J. Veyrenc の適切な表現に従って言えば、「完了アスペクトは当該動作を時間ラインの上に道標のごときかたちで位置づけている」）。「時間ライン上の道標」としての完了アスペクトは、ロシアの歴史学者 V. Ključevskij がその名著『ロシア史講和』（1904）の中で「大ロシア人の心理」と題した一節において引き合いに出しているところの「大ロシアの夏」に極めてよく似ている。

ひとつのことを大ロシア人は確信している——それは、晴れわたった夏の仕事を惜しまなければならないということ、自然は彼らに対して農作業を行うのに好都合な時間を僅かしか与えてくれないということ、そして、短い大ロシアの夏は時ならぬ思いがけない悪天候で更に短縮されがちであるということ、である。このことは大ロシアの農民をして必然的に、短期間に多くをなし、頃合を見て一気に農作業にけりをつけ、それから後は仕事なしで秋と冬を過ごすというやり方をとらせた。かくして大ロシア人は、その力を短期間のあいだに集中して緊張させることを身につけ、迅速に、熱病のごとく、しかも効果的に働き、後は、強制された秋と冬の無為の中で休息するように習慣づけられていったのである。

完了アスペクトによって表示された動作は、直接の先行時間段階と直接の後続時間段階との間に埋め込まれているが故に、「大ロシアの夏」と同じく、その「始まり」と「終わり」を予め付与されていて、「必ず始まり必ず終わる」ことを運命づけられている（ただし、必ずしも「短い」動作ばかりとは限らない、*prožit' celyj vek* 「丸一世紀を生きぬく」）。そして、またそれ故に、動作そのものも、「迅速で熱病のごとき農作業」に似て、「完了ア

スペクトにおいてはプロセスの全経過があたかもひとつの『点』へと集約されていて」(A. M. Peškovskij)、「動作を個々の相に分けることができない(不可分な全一性)」(A. V. Bond arko)、そして、最終的に、当該動作が終わった後に積極的に残されるものは「当該動作はもはや行われていない」ところの後続時間段階のみであって(「無為の秋と冬」)、もし当該動作が何らかの直接の結果(状態・産物)を残す場合には、それは当然のこととして後続時間段階に引き渡されることになる(例えば、収穫のすんだ後の、株だけ残った畑)。

なお、話は余談になるが、英国に在って精力的にロシア文学評論活動を行っていたロシア人女性N. Jarintzov夫人は、その著『ロシア人とロシア語』(1916, Oxford)の中で、「悪魔に運ばれていくような」物のやり方について副詞 *lixo*がうってつけであるとし、「行く手に何があるともすべてを委ねひたすらつき進む」という意味合いをもって、更に、この副詞の持つ「快活性」は、「たとえそれが殺人にしる強盗にしる、犯罪の痕跡をまったく残さないで行われたような場合、それが見事にやってのけられたことに対する賞讃」ともなると述べている(完了アスペクトの持つ「完了」の意味合いの理解にとって極めて示唆的である)。

このように、完了アスペクトの持つ意味合い(意味特徴)(「時間的限界性」、「完了」、「不可分な単一性」etc.)は結局、動作そのものがより大きな時間ラインの中に埋め込まれている(外的に規定されている)ことからきたものであるとすることができる。このような「外的な規定」(より大きな他との一体的関係においてそれ自体が意味を持つ)は、名詞における与格、および具格において見ることができる。与格においてそれが最も典型的に表われているのが、いわゆる無人称構文における(主体)与格である(*mne xolodno*「私は寒い」、*mne dvadcat' let*「私は20才だ」など)。簡略的に言えば、これらの文における「私」は、「寒さ」あるいは「20年という歳月の経過」といったより大きな現象作用の中におかれた一個の「受け取り手」にすぎない(「私」には決定権はない<現象作用の中への「有生名詞」の埋め込み)。一方、具格については、これも極めて簡略的に言えば、(動作主の行う)動作の中に「無生名詞」が埋め込まれた場合と見ることができるが(「道具」表現における具格の持つ「自動性」；*On pišet pis'mo karandašom*「彼は手紙を鉛筆で書く」)に対して、動作主からの「働きかけ・操作」を必要とする道具、例えばタイプライターにおいては具格は用いられない(**pečatat' mašinkoj* > *pečatat' na mašinke*)、具格の用法は多岐にわたっており、個々の場合についての考察を必要とするので、この点については拙論“*K funkcional'noj semantike tvoritel'nogo padeža*”, Japanese Contributions to the tenth International Congress of Slavists, Tokyo, 1988を参照して頂ければ幸いである。